

令和4年8月21日

南の風アカツキジャパン女子日本代表特集号Ⅲ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

今回は、アカツキジャパン女子日本代表国際強化試合ラトビア戦の戦いを書きます。

第1戦目です。日本のスターターは、5番安間（PG）、88番ひまわり（SG/SF）、3番ステファニー（PF）、99番オコエ（PF）、8番高田（PF）という布陣。

立ち上がり日本代表は、ドラッグスクリーンからペイントを突いて、外が空いたら3Pシュートを打つが連続して決まらない。（0/6）すると安間がペイントアタックして決めたり、カウンターのトランジションでステファニーが走ったり、交代した平下がタイミングのいいパスカットやオフENSリバウンドに飛び込んだりして得点する。また、交代した宮崎と渡嘉敷のゴール下の合わせも決まる。

ディフェンスでは、執拗なプレス（特にボールマンへの）から、コフィンコーナー辺りでブリッツを仕掛け、相手のボール運びを制限してショットクロックを潰したり、パスカットやボールスチールしたりする戦術が功を奏した。またタイムシェアし、選手交代をさせながら精度が落ちないプレスディフェンスを展開することによって、相手のメンタルにストレスを与えることにも成功した。

しかし相手のボール運びにブリッツを仕掛けるまではよかったが、ローテーションからのカバーやカバードウンが遅れ、3Pシュートを決められる場面が何回か見られた。

一方ラトビア代表は、P&Rからコーナーへのパスや、ドライブからキックアウトしての3Pポイントシュートがよく決まるが、日本代表のプレスに手こすりターンオーバー（パスミスやスチール）を重ねることがあった。第1Qは22対16で日本がリードして終了。

第2Qは、23番山本（PG）、88番ひまわり（SG/SF）、3番ステファニー（PF）、99番オコエ（PF）、8番高田（PF）という布陣でスタート。

日本代表のプレスディフェンスは引き続き効果を発揮し、相手にストレスを与えていた。このクォーターもタイムシェアをして、交代して出た選手一人ひとりが全力でプレスをしていた。特に平下のパスカットやボールスチールの読みは圧巻で、相手にダメージを与えた。

オフENSは3Pが決まらない中、東藤のペイントアタックからゴール下の渡嘉敷への合わせや、エンドラインアタックからのドライブショットで繋いでいた。このクォーター残り1分53秒に、この試合最初の3Pシュートを左ウイングから宮澤が決めベンチが盛り上がった。

一方ラトビア代表は、P&Rやペイントアタックから外に合わせ3Pシュートを狙うが、日本代表のディフェンスにアジャストされ思うように打てない。またプレスディフェンスに手こすり、ショットクロックを削られ、ターンオーバーになったりタフショットになったりする場面がしばしば見られた。

第2Q終了時、39対28で日本がリード。前半を終わって日本代表の主なスタッツを見ると、3PTFGが1/16（6.3%）、2PTFGが16/21（76.2%）、REB19（OR6、DR13）であった。見ての通り、3Pシュートの確率は非常に低いですが、選手は打つ場面では積極的に打っていた。シューターは空いたら打つのが役割であるので後半の精度アップに期待したい。リバウンドに関しては、ボールによく絡みラトビア代表<REB17（OR2、DR15）>と互角以上であった。また、ラトビア代表のTOが14であったことが、日本代表のディフェンスの威力を表している。